

な た で ら ほ ん ど う ほ ん で ん づ き す し か ら も ん は い で ん
那谷寺 本堂 (本殿附厨子・唐門・拝殿)

種 別 重要文化財 建造物
指定年月日 昭和 25 年 8 月 29 日
所 在 地 那谷町 (那谷寺)

那谷寺は真言宗に属し、養老元年（717年）、白山を開いたとされる僧泰澄^{たいちよう せんじゆ}が千手^{せんじゆ}観音像^{くわんおんざう}を岩窟に安置したのが始まりとされ、当初は「自生山岩屋寺^{じしやうざんいわやでら}」と称した。寛和2年（986年）に、西国三十三ヶ所の巡礼を終えた花山法皇^{かざん}が訪れ、三十三所の一番霊所^{いちばんれいじよ}「那智^{なち}」と三十三番霊所^{さんじさんばんれいじよ}「谷汲^{たにくみ}」の山号から一字ずつとって「那谷寺」と名付けたと伝えられる。中世末には一向一揆の兵乱によって荒廃したが、後水尾天皇の命を受けた前田利常により再興し、山上善右衛門嘉廣^{よしひろ}を棟梁として多くの建物が再建された。

那谷寺本堂は大悲閣とも呼ばれ、寛永19年（1642年）の建造である。

本殿は岩窟の中に構築されており、屋根は無い。材には唐木⁽¹⁾が使用される。本殿の中には厨子^{ずし}があり、本尊の千手観音像が安置されている。厨子にも唐木が使用されており、戸には繊細な象嵌^{そうがん}⁽²⁾や透彫が施されている。

唐門は岩窟の入口に建てられている。屋根は柿葺^{こけら}きで、屋根面が奥に向って高くなるように傾斜している。

拝殿は岩窟の前に懸崖造り⁽³⁾で建てられている。屋根は入母屋造りで、四方の欄間には、鹿、鳳凰、鶴、松、竹、梅、蘭、橘、紅葉等の草木や鳥獣の透彫が配置されている。正面に注連縄^{しめなわ}を張るといふ神仏習合のあとも窺^{うかが}い知ることができる。

(1) 唐木：紫檀、黒檀などの、熱帯地方から中国を経て輸入された銘木。古来より高級材として重宝された。

(2) 象嵌：金属・木・陶磁器などに文様を刻み込み、そこに金や銀などをはめ込む装飾方法。

(3) 懸崖造り：崖から張り出した建物を長い柱と貫で固定し床下を支える建築方法。

